

中原悌二郎の

写真コレクション(二)

武井 敏

はじめに

昨年刊行した『碌山美術館報』第四十二号にひきつづき、中原悌二郎（一八八八—一九二一年）が収集した写真コレクションについて報告する。今回はコレクションの中でも最も点数の多い「日本仏像・肖像彫刻」についてである。六二点と伝わっているが、今回調査したところでは六三点を数えた。この誤差については、すべてのコレクション写真を紹介した後にあらためて考えることとし、ここでは中原を取り巻く古仏についてテキストをまとめるとともに、六三点の写真を紹介する。

中原の芸術観の変化

中原はロダンを神の如く崇めたが、その作品は時代を経るにつれロダンから離れていることは今日多くの美術史家が認めるところである。同種の見解は中原の親友・中村彝が中原の追悼文としてしたためた「中原悌二郎君を憶ふ」のなかの「彼れの彫刻が最も多くロダンに感化を受けながら、サンティマン（筆者注・感性）に於ては寧ろアンティックや、ゴシックに近い（引用は適宜旧漢字をあらためた、以下同様）¹⁾」にも認められる。中村はその理由を「彼れは現代に生まれながら、実に古代人の魂の所有者であつた²⁾」としている。そのきっかけとなったのは、あるいは軌を一にしていたこととして注目したいのが「その頃からして彼れは、頻りに日本の古代彫刻に興味を持ち初め³⁾」たという芸術観の

変化である。

それでは、この変化はいつ頃から生じたのであろうか。中村の「中原悌二郎君を憶ふ」の叙述は時系列にそって展開されているため、それから推定するに大正六年（一九一七）頃と考えてよいであろう。この頃の制作状況について概略すると、大正五年（一九一六）は『三宅氏像』『坪井氏像』を制作し、四月には再興日本美術院研究所彫刻部へ入り『石井氏像』『墓守老人』を制作。これらの四作品は現存するが、大正六年に制作した『福田久道の首』『裸婦トルソー』、五月月間追究した『男の脚』も意に添わず全てを毀している。続く七年（一九一八）に制作した『裸婦トルソー』やロダンの『歩く人』と同じポーズの作品も毀し、この年の制作で残るのは第五回院展に出品し同人推挙された『行乞老人』のみである。『石井氏像』から一年をおいて制作された『行乞老人』にみられる造形の深み、そして意に添わぬものを破棄するという高みを目指す姿勢は、芸術観の変化に伴うものであったとも考えられなくはないだろう。

それ以前の芸術観を示す写真コレクションに関して中村は、中原の三疊の下宿を訪れた際の光景を次のように伝える。「壁にはミレーを初めとして、ドラクロア、ミケランジェロ、ドナテロ、雪舟、牧溪等、彼れの崇拜する作家の写真版がベツタリと貼り付けられてゐた。これ等の写真版は、皆閑にあかして浅草や本郷の夜店から安く掘り出したもの⁴⁾」であった。この記述に続いて、中原がロダンの『考える人』の写真を見出し興奮した様子、帰国した荻原守衛のもとを訪れた時の様子が綴られていることからして、中原がこれらの写真を収集していた時期は明治四一年（一九〇八）以前と判断することができるだろう。この時期については、中原の妻・信が「誰に教えられるともなしに、ロダン、レンブラント、セザンヌなどの優れた作品の写真を見つけると、安く求めて来

て、或は部屋の壁に貼っつけ、手にとって眺め、そして、自らの芸術に培い、徐々に成長を続けていたのでございました。これは彼が北海道から上京して三年目、二十歳の頃のこと⁵⁾と記していることも符合する。中原が浅草で写真を探していたことについては、中原、中村の共通の友人である鶴田吾郎の「当時は外国の彫刻など見る事が全く出来ませんでしたから中原は浅草伝法院の夜店を漁っては、外国雑誌からの写真の切り抜きを見つけて来た。」との述懐もある。

この西洋美術への崇敬から約十年後の大正六年（一九一七）十二月二十二日、石井鶴三は美術院の大掃除を中原と済ませ外へ出ると、日暮里の中原の下宿へ誘われるままに立ち寄った。この時初めて下宿を訪れた石井に中原は自身の写真コレクションを披露している。

君は一つの箱を取り出して来た。それには奈良の古い仏像の写真が沢山入れてあつた。古本屋の店などで見附けては買つて置いたのだといふ。君の敏感はいゝものとなるいゝものをよく見分けた。こゝにはいづれも優秀なものばかりが蒐められてゐた。それが奈良の古美術に就いて、未だ何の智識も持たなかつた時分に、買ひ集めたものなのだから、いよく感心した。君自身も其の後奈良へ行つてから、「あの時分は何も知らず、ただ面白いと思つて買つた置いたのだが、皆有名な傑作ばかり集めて居たのだな」と云ふてゐた（強調筆者）⁷⁾。

約十年のあいだに中原は日本の古仏を志向するようになり、石井が「沢山」といふほどのコレクションを持つようになつていたのである。

これは、ロダンから離れたとみるよりは「生」を求め続けた結果、仏像のそれに気づき理解を深めていったと見るべきであろう。というの

も、この頃以降の中原の文章のなかにも相変らずロダンの名前が散見されること、すなわち「ロダンの実感と優れたアイディア」（大正九年）という表題や「空想的に迄で進んだ写実主義」（大正十三年）文中の「ロダンの彫刻は我々が現在生きてゐる人間を見るよりもつと力強くもつと生活力の旺盛なもつと瞑想的なものである¹⁰⁾」といった文面、さらに大正十年の亡くなる前にも「日本橋のとある美術品店に泰西名画の写真の来た事を知り、中原は注文して、ロダン、セザンヌ、ルノアール、またギリシヤの古い彫刻の写真など十数枚を買ひまして、それらを一枚ずつ、適當の距離に私に持たせて置いて、仰臥のまま眼鏡をかけては、町寧に、長い間見て楽しんでおりました¹¹⁾」と妻・信が語るように、ロダンに対する敬愛は変わらないものであつたからである。

それならば、なぜロダンより古仏であつたかといふと、古仏には現代にはない信仰があつたからと考えられる。なぜならば、たとえば、中原は日記のなかで「近代の人間には信仰といふものがない。だから精神的生活が廢頽を極めて居る。だから傑作が出来ない¹²⁾」（大正六年五月十六日）、「古代の彫刻家達が神に対して持つた様な謙遜な愛情を以て、我々は自然に向はねばならぬ¹³⁾」（大正七年五月十三日）と綴っているからである。こうした信仰というような精神的態度については妻・信も以下の言葉を残している。

彼は私への三年間の書簡の中にも、しばしば奈良の古芸術について書き送っておりますが、彼は深く奈良の古芸術に傾倒しておりました。それは単なる趣味としての態度ではなくて、心の奥深い処において、自然の前に跪拜すると同様な敬虔なる愛情と信仰とにおいてございました。古代の熱烈な信仰を持つておつた人々によつて作られた、至純にして、壯麗偉大な建築や彫刻は、彼の精神をい

やが上にも惹きつけ、引き揚げ、彼をして、日本ならば推古、白鳳、天平時代のものに充分比肩し得るものを作るのでなければ、満足出来ないと言わしめました。そして自分の芸術をして、さような宗教的深さに至らしめるには、まず自分自身が信仰を持ち、そして厳粛な生活を営まねばならぬとしました¹⁴。

そして実際中原の生活が以前と比べて厳粛なものとなったことについては、友人の鶴田吾郎が「中原は、美術院に入る前後で性格が変り美術院に入ってから謹厳に成った。『どうしてそんな丁寧な言葉を使うんだ。』などと冷やかしたこともある¹⁵」と伝えているとおりでである。若い頃の中原は堀進二に借りた本を質に流したり、堀に金を借りて淫売買いに行き、下宿代を払わずに下宿屋をつぶすなど相当デタラメな生活を送っていたそうであるから¹⁶、中原の性格が変わったと鶴田が感じたのも当然のことだ。この性格の変化は、古代への崇敬のみならず、一九一二年の静坐会への参座と主宰者・岡田虎二郎への帰依、一九一四年の咯血と療養のための帰省、一九一五年の上京、一九一六年の日本美術院への入院と伊藤信との婚約とも無関係ではないように感じられる。

中原の奈良訪問

そして中原は大正七年十月、ついに憧れの奈良の古寺を平櫛田中、石井鶴三、堀進二と巡ることになる。この時の中原の様子について、平櫛は「君は前から推古天平の優れた彫刻写真を集めて居った。又院の図書などで相当古芸術の予備智識を養つて居たので、何処へ行つても、何を¹⁷見ても突然の感じはしなかつたであらう。恰も旧知に接した如く、ここに心静に觀賞して居た(強調筆者)」と伝えている。その行程は石井の記述によると以下の通りである¹⁸。

初日	(中原、石井、堀) 新薬師寺、博物館
二日目	平櫛加わる。博物館、午後三月堂から戒壇院
三日目	法華堂、唐招提寺、薬師寺。法隆寺へ向かう時二手に分かれる。平櫛、堀は汽車、中原、石井は徒歩。(法起寺、法輪寺の三重塔、法隆寺の五重塔や金堂の屋根が森の中に見えるがくれた)とあるが立ち寄ったかは不詳。
四日目	法隆寺、中宮寺、法輪寺を見て観心寺に向かう。
五日目	観心寺の如意輪観音を見て、大阪へ。 平櫛は京都へ。石井は親戚へ。中原と堀は夜行で帰る。

この時の感動について中原は「愈々奈良に来て、偉大なる芸術に接し、驚敬の念に堪へない。是等の芸術と、日本の自然を考ふると、必然といふことを思ふ。たしかに是等の芸術の裡には吾等の血が流れてゐる」というようなことを佐藤朝山に書き送っている¹⁹。

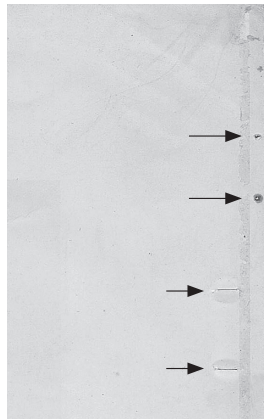
中原は翌年石井とともに再び訪れたが、石井によると「前年程はしやいだ所が無かつた」ようである。そして唐招提寺の仏頭を仔細に見、石井が「昔の人は実によく自然を見て居ますね」と言うと、中原は「だからいいのだ」と応えた。続いて石井は蟹満寺へ中原を案内すると案の定その釈迦如来像に喜んだという²⁰。実際、白鳳時代の彫刻を代表する蟹満寺の釈迦如来像は中原がコレクションするところのものであるし、中原は自身の芸術観を「天平は美し過ぎる、余りに絢爛だ。推古はい、が少しく物足りない感じがする。石井君は尤も推古に愛を持つてゐるが、僕はどうも推古に行けさうもない。僕は白鳳の含蓄ある偉大さに憧憬する、僕は白鳳に行きたい²¹」と表明しているのである。

中原の古仏写真コレクション

それでは最後に中原の古仏写真コレクションについて簡単に紹介しておこう。越前俊也氏の先行研究によれば、写真の多くは写真家・小川一真の撮影とのことである²²。

コレクションを手に取ると、すべてではないが、ホチキスの跡が散見される(写真3拡大、矢印著者)。これは中原が綴じたというよりは、おそらく製本の跡と考えられる。そして裏面の左下に数字が付されていることやその数字を訂正していること、写真17の裏面に「校了」の墨字があることから、書籍の編集過程で不要になったゲラが当時市場に流れており、それを中原が収集していたように思われる。これについては、コレクションを形成する各写真図版がいずれの刊本のものなのかを調査した上で判断した方がよいであろう。

中原の古仏写真コレクションはこれから紹介するように六三点現存するが、一方で仏像を描いたデッサン類は知られていない²³。かつてロダンの《考える人》の写真版を参考に「木炭紙を二枚つないでも入りきれないのだ²⁴」と興奮していたエピソードからすれば、仏像も描いていたと思われるし、多くの芸術家が作品を見ながらスケッチするようなこともあったと思われるのだが、そうしたことはし



なかったのであろうか。

最後に今回文字資料を渉猟するなかで興味深い文面があったので、それを紹介しておきたい。平櫛田中は先にも引用した中原の追悼文のなかで次のように記している。「君の作品に就て最近心付いた事であるが、その大方署名の無い事である。深い信仰と、絶えざる浄心とを以つて刻んだ仏像に、自己の姓名を記さざる、古代彫刻家の心事に比するのは、少し其の当を得ぬかも知れぬが、只一概に君の無頓着さのみ帰する事は出来ぬと思ふ。君の性質を知る上に興味ある事である²⁵。」

平櫛が指摘するように中原の作品にはサインがあるものは少なく、わずかに《三宅氏像》の「T. N.」を数えるのみである。平櫛のいう中原が古の仏師にならつたとの見解の正否はわからないまでも、古代に憧憬を懐いていた中原について、友人がこのような考えを記していたことは興味深く紹介した次第である。

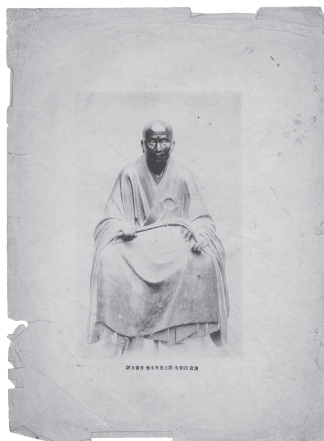
なお、以下に紹介する写真の下の数字は順に「用紙の大きさ」、「図版の大きさ」、単位はcmである。

(次号につづく)

- 1 中村彝「中原悌二郎君を憶ふ」『芸術の無限感』中央公論美術出版、一九七七年、八〇頁参照。
- 2 同書、七九頁参照。
- 3 同所。
- 4 同書、六六頁参照。
- 5 中原信『中原悌二郎の想出』日動出版部、一九八一年、一四三頁参照。
- 6 「鶴田吾郎氏談」『中原悌二郎集』碌山美術館、一九八八年、九六頁参照。
- 7 石井鶴三「中原君と私」、中原信編『彫刻の生命』アルス、一九二一年、三〇七頁参照。
- 8 仏像は写生であるとする中原と、仏像は理想であるとした佐藤朝山の議論（結局は佐藤は留学後「中原の言った通りだ」と感心し幕引きとなる）については、「平櫛田中 小林行雄 新春対談」『現代の眼』第一五八号、一九六八年、六頁参照。この文献については井原市立平櫛田中美術館学芸員青木寛明氏にご教示いただいた。記して感謝します。
- 9 中原悌二郎「ロダンの実感と優れたアイディア」『彫刻の生命』中央公論美術出版、一九七八年、五一―五二頁参照。
- 10 中原悌二郎「空想的に迄で進んだ写真主義」同書、五五頁参照。
- 11 中原信『中原悌二郎の想出』（前掲書）、一九〇頁参照。
- 12 中原悌二郎「妻、信に、婚約時代に送れるもの」中原信編『彫刻の生命』、一六五頁参照。
- 13 同書、一七二頁参照。
- 14 中原信『中原悌二郎の想出』（前掲書）、一五四頁参照。
- 15 「鶴田吾郎氏談」、前掲書、九七頁参照。
- 16 「堀進二談」、『中原悌二郎集』碌山美術館、一九八八年、九八―九九頁参照。
- 17 平櫛田中「中原君に就いて僕の知つて居る事」、中原信編『彫刻の生命』、一六四頁参照。
- 18 石井、前掲書、三二―三三頁参照。
- 19 佐藤朝山「中原君との交遊」、中原信編『彫刻の生命』、二四七頁参照。
- 20 石井、前掲書、三一―三五頁参照。
- 21 平櫛、前掲書、二六―三五頁参照。
- 22 越前俊也「日本の近代彫刻と写真―中原悌二郎を中心として」『紀要』北海道立近代美術館／北海道立旭川美術館／北海道立函館美術館／北海道立三岸好太郎美術館、一九九二年、一〇三―一一〇頁参照。
- 23 『中原悌二郎と岡田虎二郎 自然の理法・悌二郎をめぐる作家達』（図録）、田原市博物館、二〇〇七年、三六―五六頁参照。またこの件について、井原市立平櫛田中美術館、中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館に問い合わせたところ、仏像のデッサンは見たことがないとの情報を得た。記して感謝します。
- 24 中村、前掲書、六七頁参照。
- 25 平櫛、前掲書、二九二―九三頁参照。



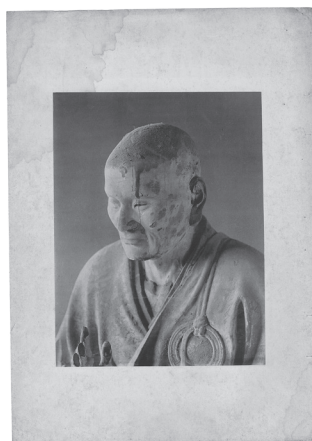
3 鶴林寺《聖觀世音菩薩立像》
38.4×26.9
28.1×18.1



2 円覚寺《仏光木像》
35.2×26
21.7×13.5



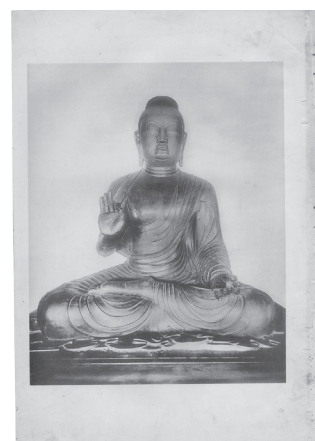
1 秋篠寺《救脱菩薩像》
22×15
15.4×11.3



6 興福寺《無著》
39.6×27.9
24.8×19



5 蟹満寺《釈迦如来坐像》
38.5×26.8
28.4×22.6



4 蟹満寺《釈迦如来坐像》
38.3×26.8
28.3×22.5



9 興福寺《十大弟子立像（羅睺羅）》
38.4×26.8
26.9×18.1



8 興福寺《十大弟子立像（富樓那）》
38.4×26.9
26.9×18



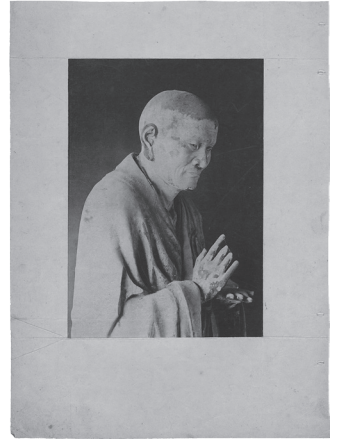
7 興福寺《十二神將》
迷企羅大將（左）波夷羅大將（右）
39.7×27.7
左22×9.1、右22×9.3



12 興福寺《八部衆五部淨》
35×27
27×21.4



11 興福寺西金堂《金剛力士》
34.4×27.1
29×19



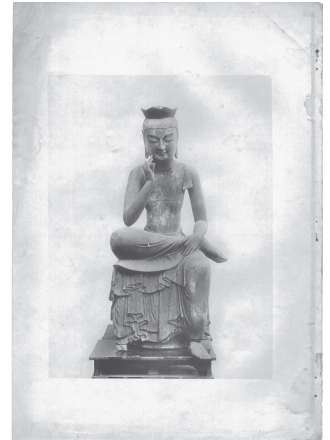
10 興福寺《無著》
34.5×25.1
21.9×15.4



15 広隆寺《如意輪観世音像》
38.4×27.1
26.8×19.7



14 広隆寺《如意輪観世音像》
38.5×27.1
26.5×19.7



13 広隆寺《如意輪観世音像》
38.4×27.1
26.7×19.5



18 聖林寺《十一面観世音菩薩》
40.3×28.6
28.2×16.3



17 広隆寺《如意輪観世音像》
39.3×27.6
左25.2×10.5 右25.2×11.8



16 広隆寺《如意輪観世音像》
38.4×27.1
26.7×19.9



21 橘寺《日羅像》
38.4×27.1
27.1×18.1



20 大安寺《不空絹索觀音像》
40.8×28.3
28.2×16.2



19 新薬師寺《薬師如来像》
38.4×27.1
26.5×18.1



24 東寺《聖僧文殊菩薩坐像》
39.4×27.2
28.2×22.7



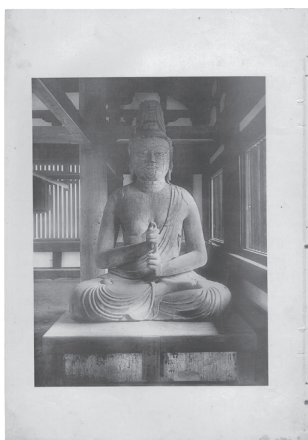
23 中宮寺《如意輪觀世音像》
38.4×27
26.5×18.2



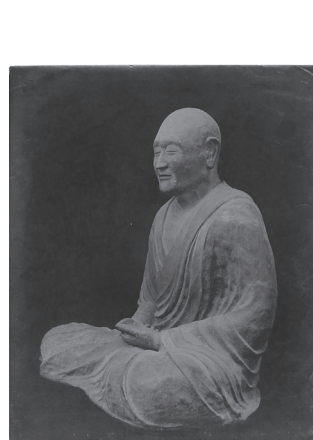
22 中宮寺《如意輪觀世音像》
38.4×26.9
26.6×18.1



27 唐招提寺《金堂廬舎那仏坐像》
18.8×14.4
15×10.7



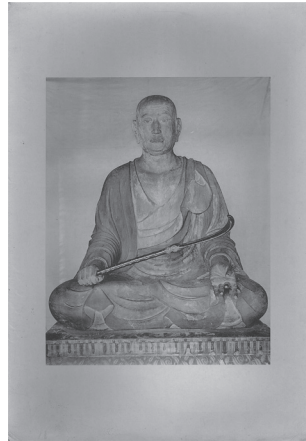
26 唐招提寺《大日如来像》
38.4×27
27.1×20.5



25 唐招提寺《鑑真》
27.5×22.8
—



30 東大寺戒壇院《持国天》
34.4×27.1
29.2×23



29 東大寺開山堂《良弁僧正坐像》
40.7×28
26.5×20.8



28 東大寺《十字額持国天》
34.9×27
27.1×19.3



33 東大寺法華堂《執金剛神像》
31.9×26.3
27.1×21



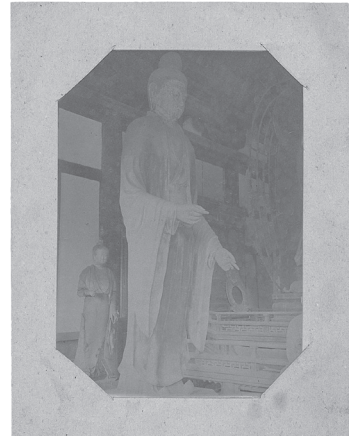
32 東大寺戒壇院《增長天》
40.5×28.7
—



31 東大寺戒壇院《広目天》
40.4×28
28.3×16



35 東大寺法華堂《多聞天》
39.5×28.5
31.4×25.7



34 東大寺法華堂《帝釈天》
19×14.7
15.1×10.6



37 東大寺法華堂《金刚力士像》
40.5×28.3
28.5×14.5



36 東大寺法華堂《広目天》
39×28.8
32.5×25.6



40 東大寺門《国分勅額の一部分》
38.4×26.9
27.3×19.6



39 東大寺法華堂《月光菩薩》
35.5×27.2
28.9×18.5



38 東大寺法華堂《梵天立像》
33.4×26.8
24.1×19.6



43 法隆寺?《多聞天塑像》
35×27.5
27.2×12.2



42 法隆寺?《日光菩薩》
34.2×27.5
27×15



41 法隆寺?《月光菩薩乾漆像》
34.8×27.4
28.3×14.9



46 法隆寺金堂《多聞天》
39.1×28
26.9×14.3



45 法隆寺金堂《觀世音菩薩像》
39.5×28
27.9×15.1



44 法隆寺金堂《釈迦三尊像》
36.4×26.2
26.5×20.4



48 法隆寺金堂《天蓋裝飾鳳凰》
38.4×26.8
27.2×21



47 法隆寺金堂《天蓋裝飾伎樂飛天》
38.4×27
27.2×23.3



50 法隆寺金堂《阿彌陀三尊像》
38.5×26.4
29.2×23.8



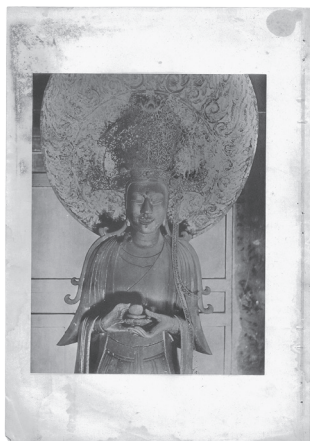
49 法隆寺金堂《葉師如來坐像》
39.7×27.4
27.1×23



52 法隆寺塔《四面具》
女子坐像（東面）（左）菩薩像（北面）（右）
40.9×28
22.8×24.8



51 法隆寺塔《塔本四面具》
天部像（北面）（中央）女子坐像（東面）（左右）
35.2×27.1
29×18.2



55 法隆寺夢殿《救世觀音》
38.3×26.9
26.4×20.5



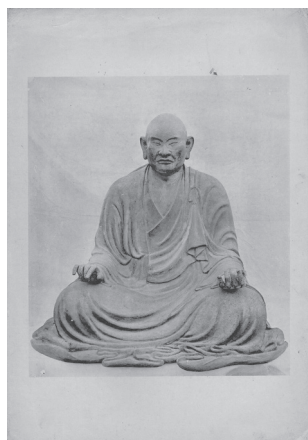
54 法隆寺夢殿《救世觀音》
38.3×26.9
27.8×21.2



53 法隆寺東院《夢違觀音》
40.7×28.3
各28.9×10.8



58 法隆寺網封藏
《金銅觀世音菩薩立像（二軀）》
38.5×29.4
29.1×19.7



57 法隆寺夢殿《行信僧都坐像》
40.5×28.2
27.8×24



56 法隆寺夢殿《行信僧都坐像》
18.8×14.7
15×10.6



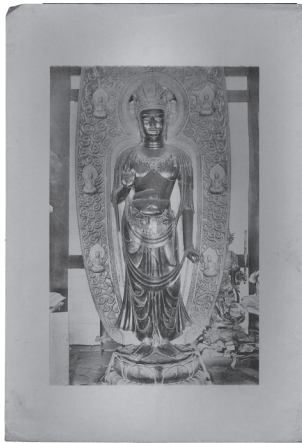
61 薬師寺
薬師三尊像 (月光と薬師如来)
40×25
26×18.6



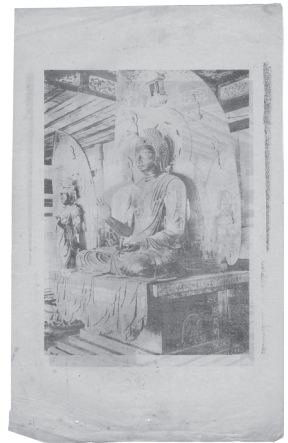
60 薬師寺《比丘八幡神像》
38.3×27.1
26.4×20



59 薬師寺《仲姫命像》
38.3×27.1
25.5×20



63 薬師寺《日光》
40.8×28
29.619.7



62 薬師寺
薬師三尊像 (月光と薬師如来)
40×25
26×18.6

	作品名等	裏面に貼紙	裏面貼紙の形式等	裏面貼紙等の記載	裏面の印字や鉛筆で改めた数字
1	秋篠寺 救脱菩薩像	無	薄紙	表面に薄紙あり、そこに「救脱菩薩像秋篠寺藏」	無
2	円覚寺 仏光木像	無	表面文字(黒字)	表面に「鎌倉円覚寺 開山仏光木像 作者未詳」	無
3	鶴林寺 聖観世音菩薩立像	有	裏面貼紙	「第十四図 聖観世音菩薩立像 金銅製 作者不詳 身長二尺九寸 播磨国 鶴林寺藏」	「22」を消して「30」
4	蟹瀧寺 釈迦如来坐像	有	裏面貼紙	「第十五図 釈迦如来坐像(正面) 金銅製 作者不明 長八尺八寸 山城国 蟹瀧寺」	19を消し25、それを消し27
5	蟹瀧寺 釈迦如来坐像	有	裏面貼紙	「第十五図 釈迦如来坐像(正面) 金銅製 作者不明 長八尺八寸 山城国 蟹瀧寺」(側面の写真だが、正面のものも貼られている)	「20」を消して「28」
6	興福寺 無著	有	裏面貼紙	「第十四図 無著菩薩像 木彫彩色 運慶作 奈良市 興福寺北園堂藏」	無
7	興福寺 十二神将迷企羅大将(左) 波夷羅大将(右)	無		無	無
8	興福寺 十六弟子立像(富楼那)	有	裏面貼紙	「第一四 十六弟子立像(富楼那) 乾漆著色 作者不詳 身長四尺九寸三分 奈良市 興福寺藏」	無
9	興福寺 十六弟子立像(羅睺)	有	裏面貼紙	「第二四 十六弟子立像(羅睺) 乾漆著色 作者不詳 身長四尺九寸 奈良市 興福寺藏」	無
10	興福寺 無著	無		(赤字で「無著像」とあり)	無
11	興福寺西金堂 金剛力士	無	英語表記	表面に「KOPUKUJI MONASTERY」「PLATE NO.417」「KONGO RIKISHI OF SAIKONDO」	無
12	興福寺 八部衆五部淨	無		無	「11」
13	広隆寺 如意輪観世音像	有	裏面貼紙	「第一四 如意輪観世音像 木彫 作者不明 長四尺四分 山城国太秦 広隆寺藏」	無
14	広隆寺 如意輪観世音像	有	裏面貼紙	「第二四 如意輪観世音像(側面) 木彫 作者不詳 長四尺四分 山城国太秦 広隆寺藏」	鉛筆「34」
15	広隆寺 如意輪観世音像	有	裏面貼紙	「第三四 如意輪観世音像 木彫 作者不詳 長二尺九寸五分 山城国太秦 広隆寺藏」	鉛筆「33」
16	広隆寺 如意輪観世音像	有	裏面貼紙	「第四四 如意輪観世音像 木彫 作者不詳 長二尺九寸五分 山城国太秦 広隆寺藏」	鉛筆「36」
17	広隆寺 如意輪観世音像	無		無(墨で「校了」の文字アリ)	「10」
18	聖林寺 十一面観世音菩薩	有	裏面貼紙	「十一面観世音菩薩(国宝) 乾漆金箔押 高一丈 奈良県桜井町 聖林寺藏」	無
19	新薬師寺 薬師如来像	有	裏面貼紙	「第五四 薬師如来像 金銅製 作者不詳 長二尺四寸一分 奈良市 新薬師寺」	「21」の「1」を消して鉛筆で「9」
20	大安寺 不空罽索観音像	無		無	無
21	橘寺 日羅像	有	裏面貼紙	「第六四 日羅像 木彫彩色 作者不詳 長五尺 大和国 橘寺藏」	無
22	中宮寺 如意輪観世音像	有	裏面貼紙	「第一四 如意輪観世音像(正面) 木彫 作者不詳 長五尺二寸 大和国 中宮寺藏」	「8」
23	中宮寺 如意輪観世音像	有	裏面貼紙	「第二四 如意輪観世音像(側面) 木彫 作者不詳 長五尺二寸 大和国 中宮寺藏」	「9」
24	東寺 聖僧文殊菩薩坐像	無		無	無
25	唐招提寺 鑑真	無	印面紙	無	25
26	唐招提寺 大日如来像	有	裏面貼紙	「第七四 大日如来像 木彫彩色 作者不詳 長一丈一尺六寸 大和国唐招提寺藏」	無

	作品名等	裏面に貼紙の形式等	裏面貼紙等の記載	裏面の印字や鉛筆で改めた数字
27	唐招提寺 金堂廡舎那仏坐像	無	写真別紙	無
28	東大寺 十字額持国天	無	薄紙	無
29	東大寺開山堂 良弁僧正坐像	無	無	無
30	東大寺戒壇院 持国天	無	英語表記	無
31	東大寺戒壇院 広目天	無	英語表記	無
32	東大寺戒壇院 増長天	有	裏面貼紙	無
33	東大寺法華堂 執金剛神像	無	貼り紙	「18」消して、鉛筆「20」消して鉛筆「24」
34	東大寺法華堂 帝釈天	無	写真別紙	無
35	東大寺法華堂 多聞天	無	写真別紙	無
36	東大寺法華堂 広目天	無	写真別紙	無
37	東大寺法華堂 金剛力士像	無	無	「17」消して鉛筆「9」消して「22」
38	東大寺法華堂 梵天立像	無	薄紙	無
39	東大寺法華堂 月光菩薩	無	英語表記	「16」消して鉛筆「22」
40	東大寺門 国分勅額の一部	有	裏面貼紙	無
41	法隆寺? 月光菩薩乾漆像	無	薄紙	15
42	法隆寺? 日光菩薩	無	薄紙	無
43	法隆寺? 多聞天塑像	無	薄紙	無
44	法隆寺金堂 釈迦三尊像	無	無	1
45	法隆寺金堂 觀世音菩薩像	有	裏面貼紙	無
46	法隆寺金堂 多聞天	無	写真別紙	「14」
47	法隆寺金堂 天蓋裝飾伎樂飛天	有	裏面貼紙	「7」
48	法隆寺金堂 天蓋裝飾鳳凰	有	裏面貼紙	「6」
49	法隆寺金堂 薬師如来坐像	無	無	「2」
50	法隆寺金堂 阿彌陀三尊像	無	貼り紙	無
51	法隆寺塔 塔本四面具 天部像(北面)(中央) 女子坐像(東面)(左右)	無	写真別紙	無
52	法隆寺塔 四面具 女子坐像(東面)(左) 菩薩像(北面)(右)	無	無	無

	作品名等	裏面に貼紙の有無	裏面貼紙の形式等	裏面貼紙等の記載	裏面の印字や鉛筆で改めた数字
53	法隆寺東院 夢違観音	無		無	「13」
54	法隆寺夢殿 救世観音	有	裏面貼紙	「第一図 観世音菩薩立像 (其一) 木彫 作者不詳 長六尺五寸 大和国法隆寺夢殿」	5を消して4
55	法隆寺夢殿 救世観音	有	裏面貼紙	「第二図 観世音菩薩立像 (其二) 木彫 作者不詳 長六尺五寸 大和国法隆寺夢殿」	4を消して5
56	法隆寺夢殿 行信僧都坐像	無	写真別紙	無	「26」
57	法隆寺夢殿 行信僧都坐像	無		無	「12」
58	法隆寺綱封藏 金銅観世音菩薩立像 (二軀)	無	表面文字 (朱字)	表面に「綱封藏 金銅観世音菩薩立像 (二軀) (其二) (法隆寺)」	無
59	薬師寺 仲姫命像	有	裏面貼紙	「第九図 仲姫命像 木彫彩色 作者不詳 長一尺二寸 大和国 薬師寺藏」	無
60	薬師寺 比丘八幡神像	有	裏面貼紙	「第八図 比丘八幡神像 木彫彩色 作者不詳 長一尺二寸八分 大和国 薬師寺藏」	無
61	薬師寺 薬師三尊像 (月光と薬師如来)	無		無	無
62	薬師寺 薬師三尊像 (月光と薬師如来)	無		無	表面左下隅に鉛筆「31」
63	薬師寺 日光	無		無	無